

大正十一年

アインシュタイン教授の日本感想記

石原純・訳

私は近年世界を方々旅行しました。それがひとりの学者にとつては、もともと多過ぎるほどでした。なぜなら私のような人は本来静かにその部屋に坐つていて研究しているはずですから。ところで私のこれまでの旅行ではいつも或る申訳がありましたので、私のそれほど鋭くない良心はそのお蔭で安心することができました。しかし日本への山本氏の招待が来しましたときに、私はすぐさま、数ヶ月もかからなければならなかったその大きな旅行に出ようと決心しましたのですが、それに対しての私の申し訳は、もし私が日本を目の当りに見るためのこの機会を利用せずに見過ごしてしまつたてもあろうならば、私は自分にいくら悔いても及ば

なかつたであろう、ということより外のものではない得ないのでした。

私が日本へ招待されたということのみならず聞き知つたその時ほど、私がベルリンで多く、また真から羨ましがられたことは、私の生涯に決してなかつたのです。なぜなら、この国ほど私たちにとつて神秘の覆いで包まれているものは外にどこにもありませんから。私たちの処でたくさんの日本人が寂しく生活し、熱心に学び親しげに微笑しているのを見ます。誰もこの自守的な微笑の背後に隠れている感情を探し出すことは出来ません。そしてそれでも、私たちの心とはまるで異つたものがその背後に挟まつていることは判ります。

それはあの日本風な、私たちの方へ輸入されているたくさんの小さな品物にあらわれ、また日本の影響をうけて時々の流行になつてゐる文学などに於ても見られてはいます。が、私が頭のなかに日本についてもつていたすべてのものは、私にちつともはつきりした形像を与えることができませんでした。

私の好奇心が極度に緊張したのは、私が北野丸で日本の海峡（瀬戸内海）を通り、たくさんの愛らしい緑の島々が朝陽にかがやいているのを見たときでした。しかしいちばん多く輝いていたのは、すべての日本船客ならびに全船員の顔でした。多くのやさしい女たちは、いつもなら朝食のまえに決して顔を見せたこともなかつたのですのに、落ちつかずにそして楽しげに、朝の六時ごろから甲板の上を歩きまわり、荒んだ朝風をも気にせず、もう故国の土が見えはしないかと待ち望んでいました。どんなに深い感動がみんなを捉えていたかを見たとともに、私は感激せられました。日本人は外のどの国人よりもっと多く彼の故国を愛し、また彼の国人を愛しています。彼は外国語を話すことはできても、またあらゆる外国の事物に対してひ

どく好奇的な心をもつていても、それにも拘わらず、どの国人よりも外国ではもつとよそよそしく感じています。どこからそれが来ているでしょうか。

ようやく二週間しか私はまだ日本にいません。そして、まるで全体が私にはまだ最初の日と同じように秘されていきます。けれども幾らかを私は理解し得ました。最も眼についたのは、日本人が欧米人に対して遠慮ぶかいことです。私たちの方では、全教育は、私たちが出来るだけ都合のいい条件のもとに個人として生存闘争を効果おおく取り得るように向けられています。特に都市に於ては、極度の個人主義や、最高圧力の緊迫のもととのあたり構わない争闘や、出来るだけたくさんの贅沢と享楽とを贏ち得んための熱烈な労働などがあるのです。家族の結合は緩んで来、芸術や道徳の伝統のふだんの生活に対する影響は比較的の僅かです。個人の孤立はこの生存闘争の必然の結果と見なされますが、それは人間から、共存に於ける向上を与え得るところのただ一つのものである、あの美しい安慰を奪つてしまします。主として唯理主義的な教養は——それは私達の事情のもとでは實際生活に欠くことのでき